

第1回高知県教育振興基本計画検討委員会 質疑・応答、意見交換の概要

質疑・応答

委員

資料のベクトルという言い方がちょっと分かりにくいので、何か違う言い方に替えた方がいい。

事務局

方向性を合わせるという意味で使っている。最近頻繁に使っているので、少し検討をさせていただきたい。

委員

使う理由は何か。カタカナ語は、日本語に定着しないので、敢えてそれでしか使えないときに使うものである。そうでないと、ノーマライゼーションもそうだが、結局分かっているようで分からないということがある。方向性の方が明確である。使う意味があるのであればいいが。

事務局

検討する。

意見交換

委員

産業教育審議会でも教育委員会と話すが、現状でも学校はカリキュラムが一杯で、なおかつ社会的にもマスコミからもめったに誉めてもらえず、先生もきついただろうと思いながら要望はしている。これだけの内容を、新たにできるはずもない。「体」は別にして、「知」と「徳」というのは非常に接近したものだと思うので、一つだけはワンフレーズでみんな語り合って、そこだけはやろうというようにしないと、総花過ぎて、細々としたことに追い回されて消耗し、例年の通りということになるだろうと想像がつく。集中化・単純化していただきたい。

委員長

余りにも施策が多すぎるので、もう少し集中化と単純化ができないかということである。

委員

説明いただいた内容は、高知県教育振興基本計画としても、別の県に言い換えて、何々県教育振興基本計画としても、どこでも使えそうな感じに聞こえた。

高知県は人口が急速に減っていている状況の中にあるので、やはり高知県で生きていきたいという子どもたちを育てたい。また、高知県に「こういうところで住んで生きていきたい」という人たちにたくさん来てもらいたいということもいつも考えている。高知県は産業教育に非常に力を入れているが、どうやったら高知県のこの良さをアピールできるか、この高知県に住んで子どもたちが良かったと思えるか。地域の人たちが、高知県を本当に素晴らしものにしていくと、高知県全体で頑張ってやってきている。

課題を洗い出しての説明だったので、課題解決についてはいろんなことを網羅している。実際これだけたくさんあるが、一つひとつやっていくわけじゃなくて、多分大きくまとめた形で進めていくので、例えば学校教育で言えば、しなくてはいけないことはたくさんあるが、探究的な学習をやっていくと、キャリア教育も心育でも全部できる。チーム学校も、そういう作り込みをすると、いろんなことが解決できていく。解決はできるが、高知県としてどういう人を育て、この何十年か先にこの高知県でどういうふう生きていくか欲しいのかという、高知県の特色を思い切り出したものにしたいと思う。「こんなに課題があるから、みんなで頑張りましょう」というこ

とだけだと、息が詰まる。

学校では総合的な学習の時間などもあり、それから生涯学習では、学校支援地域本部をつくったり、コミュニティスクールにしたりしているが、もう、学校が頼んで地域にやってもらおうという時代は過ぎたと思う。学校もするが、地域も一緒にする。みんなで高知県の教育をつくる、それが楽しくてしょうがないという県にしないといけないと思っている。何かそういう特色を出したいと思う。一つのポイントは産業だと思う。

委員長

この施策の多さをどうにかしたらどうか。あるいは特色を出したらどうかということについて意見は。

委員

施策が多すぎるということについては、今、学力支援は構造的課題と言われたが、それに対応するには、構造化した対策が必要である。その場合、学校内でどういうことを行い、学校外とどう連携していくのかという観点が必要だと思う。チーム学校もそうだが、SCやSSWも結局校外の人になってしまうと思うので、どんなことを求めて、その中間的な人とどう連携し、それを市町村がどうサポートして、どういう時に県まで支援の手立てが欲しいと連絡すべきなのか、また、中芸広域連合などもあるので、広域で見るべきなのか等、階層性、段階的支援が必要ではないだろうか。

高知県の特色という点では、チーム学校を教員とは異なる専門性や経験を有する専門的スタッフを学校に配置すると捉えてしまうと、各学校にどれだけ支援を投下できるかということになり、高知県では難しいので、それよりも市町村レベルや教育事務所などに校外の中間的な連携としてリソース、資源がある場所をつくった方が有用である。それは、特別支援の通級指導教室のイメージで、通級指導教室が高知市のように教育研究所の中にあればみんなが使える。しかし、他のところのように学校内につくってしまうと、学校の裁量権がすごく反映されて、学校外の人が通級できなくなってしまうので、学校外に正規の職員として配置して、みんなが使える方が高知県らしい。カタカナで言えばリソースセンター。支援がある場所は学校外と中間的にあり、みんなが使えるということが大事だと思う。

最後に、特別支援教育の考え方が資料6において、「障害の状況に応じた」になっている。不登校の問題であったり、暴力の問題であったり、発達支援もそうだが、文科省も「教育的ニーズに応じた」と言っているので、「ニーズに応じた」と広く捉えると、先ほどの探究的な学習の例のように、厳しい環境の家庭の子もたくさん入ってくるし、重複して困難を持っている子もたくさん入ってくる。しかし、「ニーズに応じた」という表現は、特別支援学校の方でしか出ていない。「障害に応じた」ではなく、「教育的ニーズに応じた」とすると、本当に大変な環境にある、いろいろなものを持っている者の支援にもなっていくので、敢えてここは高知県として「教育的ニーズに応じた」と打ち出して欲しい。

委員長

施策が多すぎるのではないか。それを構造化、階層化してはどうか。あるいは特色に応じて系統化してはどうかというご意見が出ているが、事務局から。

事務局

1点目の施策の集中化についてであるが、教育委員会あるいは学校で取り組んでいくことを全部並べている。その中で今の高知県の課題に対応していくために何が必要なのか、どういう対策が必要なのかということ十分に考えた上で、集中化していきたい。一つは基本方向1として、「チーム学校」ということを打ち出すということ。国も「チーム学校」を進めている状況であるが、この「チーム学校」をきちっとやっていくということを出したということが少し特徴的

なものである。構造化については、学校内では学校の経営のチーム化ということで、教職員が力を合わせてやっていただくというところがあり、学校外については、地域の力や専門人材をきちんと活用していくという形での対策の整理の仕方をしていく。それから、基本方向2の「厳しい環境にある子どもたちの支援」であるが、この頃子どもの貧困について、よく言われている。高知県としては、そういう子どもたちが多いいことを踏まえて、とにかくそういう子どもたちがきちんと未来を切り開いていけるような対策を責任をもって、教育行政であり学校が地域の力もお借りをして推進していく。こういったことが集中化ということでもあり、これをやっていくのだということを知徹底していきたい。

また、人口も大変減っていく状況の中で、県においても人口減少対策等は非常に重要という認識で取り組んでいる。教育面でも高知県の中で生きていくんだ。高知県で頑張っていくんだという子どもたちを育てていくということは非常に重要なことだと考えている。基本方向1にも協働教育と言うようなものもある。キャリア教育等をしっかり位置づけて進めていきたい。

加えて、高知県らしさということについてだが、他県の大綱や教育振興基本計画について随分勉強した。他県のを整理した限り、この基本方向1と2は少し特徴的であると考えている。こういったことを行政もそうだが、学校現場でも意識していただきながら、ぜひ集中化して取り組んでいきたい。

あと、教育理念についてだが、実は非常に頭を悩ましており、案として今日お見せできる状況にならなかった。その点、お詫びはしないといけないと思っているが、その中で、少し高知県らしさというものが打ち出せないかと思っている。なかなかワンフレーズでというのが難しいところだが、教育理念と対策の基本方向を併せて高知県らしい教育振興基本計画をと今のところ考えている。

構造化した対策ということについては、学校内ではもちろん子どもたちを育てる取り組みを日常的にやっている。学校外では、一例になるが、例えば地域との連携をどう進めていくかということについては、今年度から学校支援地域本部の設置を何とか促進をし、高知県の子どもたちを地域総掛かりと言うか、地域総ぐるみで育てる地域の体制をつくりたいということで、県教委の指導主事を教育事務所へそれぞれ配置し、高知市の教育委員会へも配置をして取り組んでいる。適切なリソースの配置ということについては、人員配置の中でも十分に考えていきたいと考えている。

教育長

地域、地元を愛するということが中心になるかと思う。高知県で頑張る子どもたちを育てるという視点はもちろん大変大事だと思っている。しかし、教育振興基本計画ということなので、地域で頑張る子どもを育てると同時に現行の計画の教育理念の、「世界にはばたく」のように、外に向かって頑張るといことも含めて子どもたちを育てる視点も要る。ある意味、両面を今回の理念の中できっちりと書いていくことが必要と考えているので、その辺りの意見をいただけたらと思っている。

そして、施策が網羅的になっているということについては、これは、教育振興基本計画であり、本県の教育を進めていくための全体像ということなので、議論を集中してやっていただくということはいいが、この計画全体としてはどうしても網羅的になってしまうということについてはご理解を賜りたい。

また、例えばスクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーは、学校内に配置するよりも学校外に置いた方が効率的ではないかということについては学校に配置をした方が常時先生方が相談しやすいという面もある。そういう意味でいうと学校への直接配置もあり得るし、高い視点からのアドバイスができるようなレベルのスクールカウンセラーやソーシャルワーカーを広い

エリアで配置し、個々の相談に応ずるなどというようなことも必要ではないかと考えおり、来年度以降、例えば心の教育センターにそういった立場のスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーを配置するというようなことも検討したいと考えている。

委員

小・中学校に関して言えば、小学校での成果がなかなか中学校につながっていないという問題、あと生徒数の問題もそうだが、学校支援地域本部であれ何であれ、今は、地域と学校との関係が小学校単位で多くは動いている。それが中学校単位で動けるようになると、随分違ってくるのではないか。小中連携も進むだろうし、地域も中学校にもっと目を向けてくれるようになるのではないかという期待感を持っている。

もう一つ、高知県らしさということ言えば、先ほど産業教育という話があったが、科学教育の観点からも考えてみてはどうかと思っている。先日、高知コアセンターの研究者と意見交換をする場があったのだが、高知県は自然科学の分野でさまざまな条件が整っているようで、そこに高知コアセンターのような世界最先端の施設があり、研究者がいる。そういうところとうまくタイアップすれば、もっと高知県の子どもたちは理科好きになるだろうし、理科に対する関心が高まってくるのではないかと、ぜひ私たちを使ってくださいというお話だったのだが、高知コアセンターに限らず、高知工科大学や高知大学理学部等さまざまなところと小中高等学校がつながるような、そういう仕組みができればありがたいと思っている。

全国学力・学習状況調査も主に国語と算数・数学が挙げられているが、理科も本年度は結果が出ており、中学校はその結果も全国水準よりも5、6ポイント低い。小学校はほぼ全国レベルだが、まだまだ十分な状況ではない。その辺にもっと目を向けていきたいと思っている。

最後に、徳に関する取り組みでは、どうしても生徒指導上の問題や不登校等の課題に目がいくが、望ましい生き方をどう子どもたちに身に付けさせていくのかということも大事である。道徳の教科化の問題にも触れられているが、まさに学校は道徳の時間、これからは教科道徳を推進していくということになるが、その時間をどう有効に活用していくのか、その中身をどう充実していくのかということは避けて通れない。このことについて、非常に現場でも困っており、現在の道徳の時間もなかなか課題があるのだが、教科道徳になったときに、子どものために、あるいは実際にさまざまな道徳的な育成にどうつなげていけばいいのかという面にももうちょっと力を入れていきたいと思っている。

委員長

地域と学校との連携、科学教育、道徳の教科化等についての意見であったが、これに関連して何かあるか。

委員

中学校区の連携はすごく大事だと本当に思っている。芸西村等では保幼小中合同の授業研を組んでいただき、管理職や養護教諭等が参加し、中学校の先生が、保育園の保育を見てコメントしたり、保育園、幼稚園で大事にしたいことを学んだりして、中学校での育ちにつなげたり、保育園、幼稚園の方も、送った子たちがどうなっていくかを考えることができている。中学校区での合同授業研というのは面白い取り組みで、芸西村、奈半利町、仁淀川町などでやっている。本当に中学校区というのはすごく大事である。

保護者支援といったときに、保護者に何かを伝えようとしたら、保育園、幼稚園段階がもう最後だと思う。小学校の段階で保護者研修を行っても、聞いて欲しい保護者は来ない。中学校は学校の先生が困っている学校ほど、授業参観にすら来ない。このような状況なので、研修をするなら保育園、幼稚園で学芸会や発表会の後に、子どもの面倒は見ておくので一緒に話を聞きませんかみたいなものになると思う。

事務局

地域との連携が小学校区単位で動いているという話については、先ほども少しご説明したが、地域との連携のために学校支援地域本部をつくっていききたいという思いで、指導主事の配置をして進めているところである。その中では、小学校だけではなく、中学校区での学校支援も重要だと考えており、実際に中学校区での設置の動きも出てきている。昨年度末に比べれば、随分地域の皆さん方の力をお借りできる取り組みが指導主事の配置もあって進んできた。そこを徹底していくということで、きちっと位置づけている。

それから、科学教育、高等教育機関等の力をお借りするというのも非常に大事だと思っており、書くとしたら小・中学校の知の分野が中心になるだろう。理科については、中核となる教員、「コア・サイエンス・ティーチャー」を高知大学とも連携し、一定育ててきた。理科の指導がきちっとできる教員がかなり育ってきているところである。こういった活動の中で、非常にレベルの高い科学に触れる機会など子どもたちにつくっていくことで、理科好きの子どもを育てることもつながっていくだろうと思っている。その辺りは、対策を具体的に書くときに検討する。

また、道徳の教科化については、県教育委員会事務局としても、非常に重要であると考えている。生徒指導上の諸問題の改善、子どもたちの心をいかに良くしていくか、そういったことの中でも非常に重要なものだと思っているので、教科化も見据えて、具体的な対策について今県では、このような大綱や教育振興基本計画の議論を踏まえて、次年度の予算の検討、編成作業をしている。その中でもきちっと検討したうえで計画にどういう形で道徳教育を位置づけるかということを考えていきたいと思っている。

それから、保幼小中の連携や中学区単位の連携も、非常に大事だと思っている。基本方向としては、基本方向の4の(3)の校種間の連携強化のところを書いていくということを検討していく。

委員長

基本方向6の(2)に、新図書館があるが、ここは科学館もあるので、ぜひ科学館も加えていただければと思う。その他、先ほどから就学前教育、あるいは家庭教育の辺りに話が向いているが、その辺りでご意見を。

委員

本当に小学校に行ったら保護者が参観日に行く人数が減ってしまう。しかし、保育園・幼稚園の時代は保護者の目がすごく子どもの方を向いているので、幼稚園で何かがあるとか言ったら必ずといっていいぐらい両親のどちらかが来る。

その中でどうやって支援をしていくかだが、県教委幼保支援課の先生たちが親育ち支援の講演会に来てくださったり、生活習慣のアンケートをしたり、愛着関係が大事だという話などに乗じて保護者に言い続けている。なかなか思うようにはいかないが、最近ゲームや携帯電話なども幼児期のところからすごく使うので、それらについても、言うことを聞いてくれなくても言い続けていこうと最近固く決意をしている。

それから、保幼小中連携については、中学校の先生たち、小学校の先生たちがどのような考えで子どもを育て、私たちはそれを受けてどのような考えで子どもを保育していったらいいのか等が、保幼小中でみんなが集まって考えることで分かってくる。先生たちとも気軽に話せるような間柄になり、こんなにしてくれ、あんなにしてくれみたいなことを気軽に言い合えるような関係になりすごくいいことだと思っている。

そして、この基本方針3の課題のところ1個目と2個目だが、幼児教育は小学校以降の教育とは違い、子どもが遊びの中で、体験をしながらいろんなことを学ぶので、小学校以降の先生が一斉に教える形の教育とは全然質が違うものである。課題の最初にある「教育、保育の具体的な指

導法が明確にされていない」ということは本当にそうだと思う。ずっとその園独自のやり方でやってきているので、文科省の幼稚園教育要領に沿ったようなやり方はなかなかできていないというのが現実だろうと思う。このやり方が幼児期には伸びるということが示されているので、幼稚園教育要領等の徹底について検討していただけたらと思う。

委員

全体の論調が学校教育しっかり頑張っってやってよということが中心になっているが、子どもの教育そのものを考えたときに、親の責任という問題についてもしっかり教育振興基本計画には書く必要があるのではないかという感じがする。やはり親の責任、あるいは子どもの抱えている教育の貧困、そしてまた生まれてから高校卒業するまでの長いスパンでの教育、保育教育のあり方、せっかく作っているんで、そういう問題もちょっと加える必要があると思っている。

委員長

親の責任の明確化ということだが、PTA連合会から何かあるか。

委員

私が言うのもおかしいかもしれないが、やはり今、保護者自体がちょっと低レベル化している。うちの事務局長が言っていたが、母子手帳を渡すときに、高知県はこういう教育を目指してやっていますということがわかる冊子を渡し、将来子どもが大きくなるまで一緒にやっていくような方法を考えていってもいいんじゃないかなと思う。

それと、小学校は全国レベルで頑張ったねと言っているが、中学校になると子どもにお任せという部分も親の方にはあるので、その辺は連携を取りながら、高校進学を目指してやっていかないといけない。これは道徳の問題なのか常識の問題なのか分からないが、私は自営業をやっているが、就職してすぐ、急に連絡もなく1週間ぐらい休まれたことがある。どうしたのかと聞くと、ちょっと用事ができたのだと言っていたが、そうでなくてやはり電話連絡するべきではないかという話をしたことがある。のだが、やはりそういう常識的なことを今は分かっていないのかなと感じた。

小中高生、もちろん幼保も含めて、将来保護者になるわけなので、その辺ももっと追求し、最初の話に戻るが、母子手帳を渡すときに高知県の教育環境はこうですよということを示し、そのときから一緒にやっていくという繰り返しをしながら、改善をしながら、将来高知県は人口54万人と言われているが、その54万人の中でもレベルの高い、全国平均と言われるような体制づくりをお願いしたいと思う。

委員

先ほど中学校区で地域との連携という話があったが、うちの香南市夜須中学校区では、保育所から中学校までの一貫教育を目指してやっている。それをやるにあたって、最初は先生方も面倒だろうし、保護者も校長先生が小中で1人になるということで反対があった。しかし、始めると、先生同士の乗り入れ等で多分先生方には負担がかかったと思うが、子どもたちはにこやかになり、それまでは小学校と中学校とは隣に並んでいるのに小学校と中学校の先生同士が顔を合わせても知らん顔で通ったりするような現状だったが、今ではすっかり仲良くなって、お客も一緒にやったり楽しくやっている。最後は人と人なのかと思っている。中学校区で連携を取るとするのはとても大切だと思うので、進めていただけたらと思う。

事務局

幼稚園・保育所の段階は親に対する啓発をするいい機会だということを知った。また、母子手帳を渡すときの話もあった。本当に貴重なご意見とと思っているので、具体的にどのようなことができるかをぜひ考えていきたい。

また、保幼小中の連携については、いろんな形の連携がある。一貫校的にやるものや、地域と

学校との連携など、いろんな切り口があると思うが、いずれも大事と思っているので、できるだけ充実した書き方をしたいと思っている。

副委員長

施策の基本方向の柱は素晴らしいと思う。しかし、中身をどのように具体的に実現していくかということを委員の皆さまが言われていると思う。南国市では、私が教育長になったときに小中連携、義務教育9年間で中学校卒業するときはどういう子どもをつくるのかという目標を定めて取り組み、ようやくその成果が8年目にして出てきているというところで、4年前には、幼保支援課を所管し、義務教育だけではなく0歳児から中学校を卒業する15歳児までの一貫教育でどのような子どもを育てるか考えている。保育所、幼稚園では、遊びの中で社会性が生まれ、将来にわたって子どもたちが対応していく能力を育てており、遊びの中でけんかもし、協力もし、泣きながら育っていく。しかし、就学前教育でプツンと切れて、小学校へ行くと保育所で聞かれたことと同じことをまた聞かれると保護者の方から言われることがあり、今までは小学校と中学校で、いわゆる校長会というのでやっていたが、保育所、幼稚園の所長、園長も含んで施設長会というものを4年前から始めた。その中で引き継ぎシートをしっかりとやることにした。引き継ぎシートは県教委も出しているし、大学でも勉強してやった。その結果、今のところ小学校でも中学校でも授業参観等に来る保護者が非常に多くなってきている。これはうまくつながりができてきたことの一つの成果ではないかと感じている。従って、やはり丸秘の部分は丸秘としながらも、きちっとした連携、つながりをしていくということが、上に積み重ねていけるということになると思う。

それから、南国市の方も学力等、いじめ等、いろんな問題で取り組んでいるが、保幼小の教員も入り、4中学校のブロックごとに、自分たちの中学校ブロックでの課題は何なのかを話し合い、課題を見つけて取り組んでいる。その発表を今年度も1月6日にやるのだが、各ブロックでの取組を発表するので、他の3ブロックの取組も共有することができる。それがトータルで南国市の教育ということで、課題や成果を共有することができる。

そういう面のサポート役として、県教委の方からスクールソーシャルワーカーや、スクールカウンセラー等を配置してもらい、各学校へも派遣し、非常に困難な問題のあるところは学校へ直接配置するというので、うまく活用できていると感じている。

生涯学習の方では特に学校支援地域本部ということで、香長中学校、稲生小学校区で、いわゆるチーム稲生というものを打ち立ててやっているが、本当に「地域をあげて子どもを育てるぞ」ということでやってくれており、一つの大きな指標になってきている。学校が中心になって出していったものが地域も巻き込み、逆に地域がやっているところへ学校が出ていく、保育所が出ていく、それによって共に育っていくことができるのではないだろうか、課題を解決していくことができるのではないだろうかと感じている。

委員長

つながりという部分をしっかりとやってくださいということである。

社会教育や体育、図書館等について何か。

委員

私は高等学校体育連盟会長という立場で委員をさせていただいている。「知・徳・体」という言葉は昔からあったわけだが、今回の計画では、これを前面に出しており、やっと体育も認められてきたかなと非常に期待している。体育は大事なことであるが、どうしても学校教育の中では、特に高等学校では、部活で頑張っているというぐらいの感覚である。でもそうではなく、やはり知・徳・体のバランスが大事である。昨年、県教育委員会でスポーツ推進プロジェクト実施計画を策定し取り組んでいるが、ジュニア期の運動やスポーツにかかわる経験が一番の基本だと思っている。特に小学校では、授業の改善が大きな課題になっている。昔は、子どもたちは自然の中

で遊んだりけんかしたり、転んだりする中でルールを覚えたり、運動に親しむ経験があったが、今はそういった経験がなかなかなくて、学校の授業の中で楽しみやそういう喜びを経験していくということが絶対の条件になっている。そういった意味では基本計画の中でしっかり位置づけてもらっていることで、学校の校長を中心とした教員の意識にもつながっていくことになると思うので、非常に期待をしている。

委員

県の方がこれだけの資料を整え、方向性をすごくはっきりと出していて、本当に素晴らしいと思いつつ、最初はきついことを言ってすみませんでした。気にはしているがよりよいものにしたかったので。

資料7の社会教育の16ページだが、学校教育は非常に見えやすいので、割とそこはしっかり分析してということになるが、社会教育は範囲も広く、何もかも含まれるので、はっきりしにくくなる。これまで社会教育をずっとされてきた方々の年齢が高くなり、しかもしっかり勉強をしてよく分かって次の世代に指導もできる人たちがどんどん卒業されていくような時代に入ってきている。そこで、ここに書かれている課題の1番目と主な取組の1番目の社会教育関係者の資質能力の向上については、向上とともに、もっと人を増やすということが大きな対策になる。

また、新図書館など、高知県として拠点にできるものができてきているが、高知県に隅々まで行き渡る生涯学習の視点で見ると、公民館活動も弱っており、地域の教育への気運を盛り上げていけないといけないが、そこが社会教育の方からだけ煽るとするのが難しくなってきた面がある。それで、対策3のところにあるように、学校支援地域本部とか、コミュニティスクールのように学校を切り口にしながら地域の教育力を高めるというやり方がいい。いわゆる学校支援地域本部も学校が足りないところを補ってくださいと頼むような組織ではなく、コミュニティスクールも学校が常にリードするような組織ではなく、子どもたちやこれからの社会をどうつくるかということ相互に積極的に取り組むものにしなればいけないと思う。実は、コミュニティスクールの議論を進めていくと、地域が出来上がっているようなところでは、いやいやもうそんなことしなくてもすぐできるみたいなことを言うのだが、議論を重ねると一度ぐちゃぐちゃになる。なぜかという、今までは、学校の方が餅つきに人が何人ぐらい欲しいとか、子どもたちの学習を応援してくれる人いませんかとかいう感じで成り立っていたのが、いざコミュニティスクールになると、教育を地域として、学校と地域が一緒になってどうつくるかという議論なる。最初はこんなことできる、あんなことができる議論をするのだが、実際、じゃあコミュニティスクールの運営協議会をどうするかという具体的な話になってくると、学校のやっていることが外に見えないとか、それやったらもうちょっとしっかり言ってくださいとか、今どういう実態ですとかいう話の切り込みになり、そうこうしながら、学校も地域もこんなことができるというふうになり盛んになってきて、コミュニティスクールになっていく。だから、社会教育を学校のそういう動きから押したり、地域の社会教育を担う団体や人を育てていくというところから押したりしながら、全体を高めていくという方向を具体的にはちょっと言えないが、もうちょっと書くなど何かできそうな感じがする。

委員

図書館のことで、資料7の16ページにある。こういう書き方になるのかなとは思いますが、県民の読書環境、情報環境の充実ということだが、読書環境と言ったときにどうしても趣味的なイメージが強くなるのではないかなと今までずっと思ってきた。

実際、具体的なことで言うと、図書館では今は県のブックスタート事業に取り組んでおり、南国市の場合は10カ月健診で行っているが、市町村においては4カ月とか、3カ月というところもある。先ほど母子手帳交付時というお話があったが、0歳の早い時期に本を読みましよう、それ

がただ絵本を読んだらとっていいよとかそういうことだけではなくて、まず親子の触れ合いがあって、子どもに関心を持つ。子どもを育てていくのだという気持ちを持ちましょうということに進めている事業である。図書館というのは、そのようにして始まり、その後ずっと使える施設である。使える施設というのは、そこに足を運ぶということだけではない。

先日、高知新聞の1面に県市合同の図書館ができるということで、来館者のアンケートの結果などが出ていたが、特に県立の場合は、今でも直接来館者だけにサービスしているわけではない。県内の市町村全ての図書館や図書室に、教育委員会等を通じての図書を貸し出すということが一番の基本であるが、いろいろな情報の提供、また学習の支援などもしている。うちの図書館でも、各学校の学習支援ということで授業への資料の貸し出し等も行っており、いろんな図書情報もいただけるようにしている。

学校の方でも学校図書館を活用しましょう、全ての教科において活用しましょうというように今なっている。そして図書館の方でも図書館法により、図書館を活用して学習した内容を図書館で発表できるような場もつくりましょうということになっており、0歳からの生涯教育に携わっているという自負はあるのだが、何となくここに書いてあることがそういう内容を汲み取ることができ難いと思った。また、新図書館は、科学館、また点字図書館も入る施設であり、障害者教育にも十分に力を発揮できる施設になるので、言葉を入れるかどうかは別にしても、そういうものもあるんだということを念頭に置いていただきたいと思う。

事務局

ご意見ありがとうございます。体については明確にきちっと打ち出して「知・徳・体」ということで書き切っていくという方向で考えており、その方向でさらに検討を深めていきたいと思っている。

社会教育の関係では、確かに社会教育を担う方々の高齢化といったこともあり、なかなか社会教育を進めていく対策というものが十分でない。市町村でも十分やっただいていると思うが、そこを、方向性として学校と地域が連携、協働するとか、そういった方向でもう少し考えられないかということで、所管課とも協議をしているところで、非常に重要な視点だと思っている。

あと、図書館のところを今、このように書いているが、大切な視点をいただいたと思っている。学校の図書館活動に関しては、今のところ小中学校や高等学校等の知の分野で書くイメージであるが、社会教育の分野の市町村立図書館と県市の図書館について、先ほどのご意見も踏まえて書き方を検討していきたい。

委員長

ありがとうございます。

あと、全体の進め方とかそういう面ではどうか。

委員

平成21年にこの教育基本計画が策定されて、顕著に実績が出、小学校は学力アップしたが中学は依然としてというような結果である。やはりなぜ小学校が良くて中学校が上がらないかということが一番基本的な問題になってくるかと思う。やはり小学校の中学年からほとんどの子どもが塾通いし、学力に非常に大きな差が出てきて、中学になると私学に行った者の学力はどんどん向上し、公立でも学力に力を入れている学校に通う子どもは、維持はできるが、それ以外に子どもたちの放課後の行動が多岐にわたり、興味深いことに傾斜していくということが一番の問題ではないかと思っている。この辺を徹底的に洗い直し、見つめ直して、小学校の学力が上がった、中学もさらに上がったというふうになってもらおうと、将来にも明るい望みが持てるのではないかと思う。

また、今非常に中堅の教員の数が減っていくという中で、この振興計画が出て、職場で携わっ

ている若い教職員の方にどのように説明をされ、どのように理解され、学校運営に携わっていくのかということをやっと疑問に思ったので、説明をしてほしい。

委員長

この基本計画等について、現場はどういうふうに理解していくのか、そこの辺りのことについて

事務局

外形的に見えることで言うと、今の基本計画も、重点プランも全教職員分を印刷し配っている。しかし、多分そんなことをおっしゃっているのではないだろうと思っている。私どもは、重点プランできちっと「知・徳・体」の目標を作り、その進捗はこういう状況であるということを指導主事等を通じてさまざまな形できちっと各教員に伝えているという状況ではある。

ただ、それがどういう形で教員、職員に理解され、消化され、日々の教育活動につながっているのかということまで、正直言うと私として把握できていないところはあるが、現場を回っている事務局各課がどういう話をしているかということになってくると思うが、次の教育振興基本計画を作った折には、全教職員に周知徹底し、方向を理解して取り組んでもらえるように説明をきちっとしていかなければならないなと考えている。

委員

現状は分かったが、それに加え、今後新しい教職員の採用時には、この新しい基本計画を徹底して話してもらいたい、叩き込んでもらいたいと思う。やはり、若い教職員はいろんな未知数の可能性も、高知県の教育現場を変えていこうという意気込みもあろうかと思うのでそこをやっていただきたい。

教育長

貴重なご意見ありがとうございます。研修の中などでそういうことも徹底をしていきたい。また、具体的に活動の中で意識をしてもらおうということになると、学校では学校経営計画を作っており、この教育振興基本計画の方向性を踏まえて、それぞれの学校で実際に取り組む計画を作るので、基本計画と連動したものになると思っている。学校経営計画は、若い教員も含めて内容を一緒に協議をしてつくっていくものなので実際に自分のものとして分かってもらおうという場面もあると思う。

また、今一番大きな問題として中学の学力の問題の話があったが、我々も同じ課題意識で、冒頭で説明したように、中学校の学力の構造的な問題についていろいろ検討しているところである。一つだけではなくて、いろんな問題が絡み合っただけのことになっていると思っている。ただし、ポイントになるのはやはり授業であり、授業をいかに改善していくかという問題と、学びに向かう意欲、ここをいかに高めていくかというところがポイントだろうということで、どういう対策を取っていくか考えさせていただいているところである。

副委員長

今、基本計画の話が出たが、高知県教育振興基本計画に基づいて、34市町村もそれぞれ市町村で教育の計画をつくり校長会等を通じて各学校へ下ろしている。

市町村は市町村で教員を集めて、各市町村の計画の周知をきちっと研修を開いてしている。後は各学校に学校経営計画があるので、校長のリーダーシップのもとに学校組織あげてその目標に向かっただけに取り組むかである。各学校の計画はできているので、学校職員全体が管理職、校長を筆頭に組織あげてやるぞという体制づくりがきちっとできたところは必ず上がってくる。それに向かったの支援をするのが県教育委員会、そして市町村の教育委員会なので、校長会とのきちっとした信頼関係が大事である。また、今、県教育長が言ったように、絶対授業改革が大事である。授業を通じて子どもの力をきちっとつけてやるということ。その大前提が子どもと先生の

信頼関係の構築である。信頼関係がないといくらいい授業をしても入っていかない。やはりそれが基本だということを改めて感じている。

委員

今、教育長からの話にもあったが、最終的には学校の意識の問題である。その中でも特に校長のリーダーシップが問われるのだろうと思っている。学校経営計画一つをとっても、ただ作り上げるだけではなく、それをどう具体化していくのか、教職員にきちっとストンと胸に落ちるような下ろし方をしていくのかということが非常に大事である。重点プランは非常に目標が明確で分かりやすいものだったと思うが、結果として中学校は目標に到達しておらず反省もしているところだが、計画そのものがどうであったかというより、その計画の実行の仕方に大きな課題があったと考えている。特に校長の取り組み姿勢に差があったと思っているので、新しい振興計画ができた時には、その辺のところを校長会としても、もう一度きちっと認識をしたいと思っている。

委員

インクルージョンという考え方からすると、みんなのための学校をつくり、みんなで上がっていくはずなのだが、その中で落ちこぼしてしまう子どもがどうしてもいる。段階的支援として、県レベルで考えてほしいのは、やはり問題行動、行動障害のある子どもへの支援である。問題行動を起こしたり暴力をしたり、万引きをやめなかったりという場合、人権教育課と特別支援教育課の両方の観点がないと治らない子がいる。今は情緒障害短期治療施設とか、児童自立支援施設がそれにあたり、児相がかかわっているが、もういっぱいいっぱいになっている。特に人を傷つけてしまう子どもや自分を傷つける子どもへの支援をするのはどこか。みんなで上がっていくのだが、ドロップアウトしてしまった子どもを市町村で抱えられなくなったときに、県に助けてくれるような機関、窓口が欲しいと思う。

委員長

予定した時間がきた。いろいろ活発な意見をいただいたので、それぞれにまだ言い足りない部分があると思うが、それはぜひ事務局の方に言っていただきたいと思います。

計画を作ることも重要であるが、それをいかに実行していくかということが非常に求められていることであると思う。

この後、2回ほど会がある。1月に原案が示され、意見をいただき、修正されたものを3回目に皆さんでご議論いただき決定していくという形になろうかと思うので、またその時にはよろしくお願ひしたい。

それでは、本日の意見については事務局の方で検討いただき、次回の検討委員会で原案を出していただきたいと思います。